一般財団法人
KODAMA国際教育財団

一般財団法人ＫＯＤＡＭＡ国際教育財団

「第6回（2023年）未来のいしずえ賞」授賞式

2023年3月28日（火）　14:00～16:00

帝国ホテル東京　4階「桜の間」

実施報告書

2023年3月

一般財団法人ＫＯＤＡＭＡ国際教育財団

タイトル：　一般財団法人ＫＯＤＡＭＡ国際教育財団
「第6回（2023年）未来のいしずえ賞」授賞式
日　　時：　2023年3月28日（火）　14:00　～　16:00（受付13:30～　）
会　　場：　帝国ホテル東京　本館4階 桜の間
（東京都千代田区内幸町1－1－1）
主　　催：　一般財団法人ＫＯＤＡＭＡ国際教育財団、「未来のいしずえ賞」実行委員会
招 待 者：　主催者含め来場者　52名

目的及び開催趣旨：
○ 第6回(2023年)「未来のいしずえ賞」の受賞者公式発表、受賞者及び活動を顕彰。
一般財団法人ＫＯＤＡＭＡ国際教育財団の周知と活動紹介
○ 「未来のいしずえ賞」は、未来に向かって豊かな社会を築くために、人知れず努力を重ね、貢献した方々の功績を讃える国際賞です。
○「第6回未来のいしずえ賞」は、長引くコロナ禍で、度重なる医療崩壊の瀬戸際を、その都度陰で支え続け、医療機関だけではなく訪問看護や福祉関連施設など地域の中でも人々の命と生活を支え続けてきた看護師の方々、その教育に貢献された方、コロナ禍で沈む日本人の心を奮い立たせた世界的に活躍された方に対して実行委員会にて受賞者を検討いたしました。

一般財団法人ＫＯＤＡＭＡ国際教育財団について
<活動理念>
私たちは教育を必要としている青少年に「学び」の機会を提供し、社会の発展に寄与する人材育成の支援をしてまいります。
また、「学び」の可能性を未来へと広げ、社会で実践している人を支援してまいります。
これらの活動を通して健康で豊かな国際社会の実現に貢献いたします。

<ステーツメント>
夢と目標を分かち合う。夢を共有することが喜びとなる。目標に向かって共に取り組むことが希望となる。
誰もが「夢と目標」をもてる社会をつくる。それが私たちの願いです。

理事長　　児玉圭司
理　事　　コシノジュンコ、鳥飼重和、岡山慶子
評議員　　児玉義則、塩島一朗、関根宏一、中田恭子、中村国善、ディルク・ファウベル
監　事　　高橋浩、児玉和子、出口勝
事務局長　上阪俊司
事務局　　〒104-0045　東京都中央区築地2-12-10　ビルネット築地ビル5F
（第6回未来のいしずえ賞事務局　<朝日エル内>）
TEL:03-5565-1447　　FAX:03-5565-4914　　E-mail : mirai@kodama-mirai.org

2023年(第6回)未来のいしずえ賞受賞者

①森保 一【特別賞】サッカー日本代表監督
　（代理表彰）　田嶋　幸三　　公益財団法人日本サッカー協会　会長
②井川 順子（京都大学医学部附属病院 看護部長・病院長補佐 ）
③片岡 弥恵子（聖路加国際大学 大学院看護学研究科 ウィメンズヘルス・助産学教授）
④佐藤 禮子（日本教育財団東京通信大学人間福祉学部名誉教授、千葉大学名誉教授、
　　NPO法人キャンサーリボンズ理事、元日本がん看護学会理事長）
⑤花輪 啓子（社会福祉法人やまなし勤労者福祉会、共立介護福祉センターいけだ統括センター長）

リーフレット

ＫＯＤＡＭＡ国際教育財団 表彰事業
第6回(2023年)『未来のいしずえ賞』　推薦人・受賞者

推薦人	受賞者	受賞者プロフィール
コシノジュンコ KODAMA国際教育財団理事、デザイナー	【特別賞】 森保 一サッカー日本代表監督 （代理表彰） 公益財団法人日本サッカー協会 会長・田嶋 幸三	ワールドカップ カタール大会において絶妙な采配により 強豪ドイツ＆スペインを撃破。 長引くコロナ禍で沈む日本人の心を奮い立たせた。
宮本 享 京都大学医学部附属病院 病院長	井川 順子 京都大学医学部附属病院 看護部長・病院長補佐	京都府全域での新型コロナウイルス感染症対と医療人材育成による地域医療への貢献。
堀内 成子 聖路加国際大学 学長	片岡 弥恵子 東京都助産師会 元会長 聖路加国際大学 大学院看護学研究科 ウィメンズヘルス・助産学 教授	コロナ禍で不安を抱える妊産婦を対象に助産師によるオンライン相談の仕組みを実現。
清水 多嘉子 がん研究会有明病院 副院長、看護部長	佐藤 禮子 日本教育財団東京通信大学人間福祉学部名誉教授、千葉大学名誉教授、NPO法人キャンサーリボンズ理事 元日本がん看護学会理事長	医療界の枠を越え、社会のつながりの中での看護師育成、長期的な療養環境の向上を目指す活動を牽引。
福井 トシ子 公益社団法人日本看護協会会長	花輪 啓子 社会福祉法人やまなし勤労者福祉会 共立介護福祉センターいけだ 統括管理者	介護保険制定前から在宅医療に取り組み、住民の声を反映させた地域包括ケアシステムを 推進。山梨県全体の在宅療養介護の推進と人材育成に貢献.

2.　授賞式

主催者より挨拶

児玉圭司
ＫＯＤＡＭＡ国際教育財団　理事長

ＫＯＤＡＭＡ国際教育財団の活動の大きな柱のひとつである「未来のいしずえ賞」は、未来に向かって豊かな社会の礎を築くために、人知れず地道な努力を重ねている方々の活動はもっと脚光を浴びるべきであり、称賛すべきであると考え、この顕彰制度を立ち上げました。より良い社会へと導くために、強い意志をもって活動されている方々の功績を称える国際賞です。

これまでスポーツ部門、医療部門、保健福祉部門、社会活性化部門の各分野で活躍されている方々を顕彰させていただいてきましたが、今回も昨年に続き、５部門ではなく、コロナ禍で看護に従事してこられた方に限定して選考いたしました。

私は一昨年11月に脳梗塞を患い、入院中に看護師さんの役割の重要性を心底実感させていただきました。

井川順子さん、片岡弥恵子さん、佐藤禮子さん、花輪啓子さん、おめでとうございます。
そして、ありがとうございます。

今回は特別賞として、サッカー日本代表の森保一監督を選出させていただきました。
このコロナ禍にあって日本中が注目し、日本中を奮い立たせてくれ、スポーツを通して人間の文化の向上に寄与された功績は、未来のいしずえ賞にふさわしいということで、実行委員会人員一致で決定しました。
森保監督、おめでとうございます。
そして、ありがとうございます。

コシノジュンコ
未来のいしずえ賞」実行委員長

『未来のいしずえ賞、記念品に込めた思い』

日本独特の「おもてなし」という表現がありますが、私はこれを「表なし」と解釈しています。
未来のいしずえ賞は、表から見えないところで活躍されている方々の功績を称える賞です。

私がデザインさせていただいたこのトロフィーは、英語でjapanと表記される漆を素材に、緑は常に明るく元気でいること、四角は合理を象徴しています。

受賞者の皆さまに感謝を込めて捧げます。

岡山慶子
「未来のいしずえ賞」実行委員

『いしずえ賞表彰事業に関して経緯の説明』

今回は、先の見えないコロナ禍で献身的な努力を続けておられる看護の方をぜひ顕彰させていただこうと、日本看護協会の会長にもご相談しながら候補者を検討し、推薦人をご紹介いただき、受賞者を決定しました。

故・大江健三郎さんは1993年の看護の日の講演で、「人の痛みがわからない社会になった今、それができるのは看護の人たちだ。人の生き死に関わるところにいて、それを洞察する力を持っている看護の方たちが、日本の文化をつくっていく」とおっしゃっています。

さらに、実行委員会では、「コロナ禍の日本をこんなに元気にしたサッカーを特別に顕彰したい」という理事の意見を受けて、森保一監督を特別賞に決定いたしました。

大江健三郎さんは「人間の回復と社会の回復は重なっている」とおっしゃいました。今回の受賞者はまさに人間の回復と社会の回復に貢献された方たちだと思います。

【特別賞】　森保 一サッカー日本代表監督

特別賞　森保 一さん
サッカー日本代表監督
（当日は大阪で対コロンビア戦のため欠席）

（代理表彰）
代理人 公益財団法人日本サッカー協会 会長　田嶋 幸三さん

素晴らしい賞をいただき感謝しております。
今回、WBCで日本代表が世界一になったのを見て、改めてスポーツが日本を元気にできることを実感いたしました。そして、やはり「世界一」をめざさなければと深く胸に刻みました。
児玉理事長は長年にわたって卓球を支え、その結果、中国と伍して戦えるような選手がどんどん育ってきました。そういう長年にわたる目に見えないご苦労が世界一につながっていくのだということを感じています。
もちろん主役は選手たちです。森保監督も、栗山監督も、あまり表面に出ず、選手を立てていくタイプの指導者です。そういう意味では、今回の賞にふさわしい、まさに“いしずえ”だと思っています。
今年は世界水泳、バスケットボール、ラグビー、女子サッカーのワールドカップ、そして毎年あるバレーボール、卓球と、多くのスポーツイベントがあります。
日本を元気にするのはスポーツだということを、我々スポーツ界が自覚して、本当に日本を元気にできるようにしっかりと頑張ってまいります。これが励みの賞だということを森保監督に伝えます。

推薦人●コシノジュンコ（未来のいしずえ賞 実行委員長）

今、日本はスポーツ満開です。WBCで日本中が盛り上がりました。去年はFIFAワールドカップでサッカー日本代表が素晴らしい活躍をされ、サッカーが日本の自慢のスポーツになりました。先日もウルグアイ戦で国立競技場が満杯になりました。あれだけ多くの人が夢中になって日本代表を応援しています。ということで、本日はサッカー日本代表の森保監督を推薦させていただきます。

井川 順子さん
京都大学医学部附属病院 看護部長・病院長補佐

このたびはこのような素晴らしい賞をいただき心より感謝申し上げます。

コロナ禍に入り3年が経過しました。この3年間、京大病院がやるべき医療と感染症対策を両立するべく、宮本病院長と共に、地域一丸となって頑張ってまいりました。
本当に職員一人ひとりの頑張りと地域との連携の大切さを改めて感じました。今日この場に立っていられるのも、スタッフ一人ひとりと地域の医療施設の皆さまのおかげだと感謝しております。
京大病院では京都府のご支援により京都府全域の看護師・助産師の人材交流を進めて約８年が経過しました。自施設とは異なる医療施設に身を置き、それぞれの目標を持ってキャリアアップを図ることで、一人ひとりが素晴らしい学びを得ております。
これまでコツコツと人材交流を進めてまいりました。
今後も、いしずえ賞の名に恥じないように、この事業を通して、さらなる人材の育成、より広い地域との連携を進めていきたいと思います。

推薦人●宮本 享（京都大学医学部附属病院 病院長）

井川順子さんは、医療人材育成による地域医療の充実に大きな貢献を果たされてきました。
京大病院の看護職キャリアパス支援センターのセンター長として、京都府と連携し府下全域での看護師・助産師の人材交流を実施するなど地域医療への大きな貢献を果たしてこられました。
そして京都府立医大病院と共に、看護師の特定行為研修の指定研修機関の承認を得て、新たな人材養成の道を開拓されています。
また、新型コロナウイルス感染症対策にも力を尽くしてこられました。ご自身が感染管理認定看護師として2009年の新型インフルエンザ感染拡大時に様々な予防対策をされた経験をフルに活かし、病院内でのコロナウイルス対策にリーダーシップを発揮するだけではなく、他施設への感染対策指導を実施されました。さらに、京大病院においてワクチン集団接種を行うと共に、行政が設置した他の集団接種会場へも看護師を派遣するなど、地域連携の強化に大いに尽力されました。
これからもパンデミック対策や医療人材の育成により、京大病院、そして京都府の地域貢献にも、ますます力を発揮していただけるものと期待しています。

片岡 弥恵子さん
東京都助産師会 元会長
聖路加国際大学 大学院看護学研究科 ウィメンズヘルス・助産学 教授

このたびは大変光栄な賞をいただき、誠にうれしく思っております。
近年ほとんどの女性が病院や産科クリニックなど医療機関で出産するようになり、多くの助産師たちは病院や医療施設に勤めていますが、4万人近くいる助産師の1割は今もなお地域で活動しています。助産院や母乳育児相談、母親学級や両親学級、新生児訪問、最近始まった産後ケア事業など、地域の助産師たちは、妊娠から産後まで、妊婦さんや家族の身近で継続的な支援を行っています。
コロナ禍での東京都助産師会の活動は、地域の助産師たちが妊産婦さんの身近にいるからこそなし得たものです。妊産婦さんや小さな赤ちゃんのいるご家族が何に困っておられるのか、どんなことを不安に思っているのか、ニーズをいち早く察知して、すぐに行動を起こすことができました。
オンライン相談は2020年4月、緊急事態宣言が出てすぐに開始することができ、今も続いております。助産師たちが身近で感じている妊産婦さんの不安に対応するために、週末も含めて毎日9時から20時まで継続的にオンライン相談を実施してきました。その中で出てきたニーズ、たとえばコロナに感染した妊産婦さんの不安やお腹が痛くなってしまった場合に対応するために、家庭訪問の事業も始めました。
日本では年間出生数が80万人を切り、国を挙げていろいろな少子化対策の実行が待たれている状況ですけれども、私は地域の助産師たちの地道な活動を推進することこそが今後の少子化対策になるのではないかと思います。そのために今後も力を尽くしていきたいと思っております。

推薦人●堀内 成子（聖路加国際大学 学長）

片岡弥恵子さんは助産師となって現場で働いた後に聖路加看護大学（現・聖路加国際大学）に学ばれ、大学院で修士・博士の学位をとられた後、本学で教育研究、とくに助産師教育にずっと従事しておられます。
日本は今、少子化が大変問題になっておりますけれども、世界を見ると、SDGsの３番目の健康指標に「妊産婦さんが亡くならない」「赤ちゃんが亡くならない」という目標があります。アジアやアフリカの多くの国々の妊産婦さん10万人のうち亡くなる方は500人。日本においては1桁です。それほど日本では安全に妊娠・出産ができて、赤ちゃんが亡くならずに育っていきます。
何か変だなと思ったときにすぐに医療者に相談する。かかりつけ医に行くことができる。そういう教育レベルの高さや医療を活用する知恵があって、この高い水準が保たれているのだと思います。
助産師はお母さんのちょっとした不安に寄り添い、母親学級や父親学級で「こんなときは危険だからすぐ病院に行ってください」と教えています。そういう地道な活動が非常に重要です。
片岡先生は大学で教育に携わるかたわら、職能団体である東京都助産師会会長を務められ、コロナ禍で対面ができなくなったときに、困っているお母さんたちにいち早く手を差し伸べたいと、オンラインで様々な対応を考えてくださいました。
その功績をぜひ知っていただきたく、今回推薦させていただきました。

片岡 弥恵子さん
東京都助産師会 元会長
聖路加国際大学 大学院看護学研究科 ウィメンズヘルス・助産学 教授

佐藤 禮子さん

佐藤 禮子さん
日本教育財団東京通信大学人間福祉学部名誉教授、
千葉大学名誉教授、NPO法人キャンサーリボンズ理事
元日本がん看護学会理事長

本日は栄誉ある賞をいただき、心から感謝申し上げます。
私は約半世紀に及ぶ常勤生活を終え、悠々自適な生活へと入ろうとしたタイミングでこの賞を授かり、驚きと感謝の気持ちでいっぱいです。この受賞は、共に歩んできたすべての仲間への賞でもあります。
私の専門はがん看護学です。がんは身の内。がんに罹患した人は、がんと共に我が身を慈しみながら生活していくことが必要になります。
私はダークダックスの『絆～きずな』の歌詞が好きで、授業でも必ず学生たちに紹介していました。

糸へんに半分と書いて　絆と読みます
お互いに半分ずつの糸を　結びあうからです
糸の太さは人それぞれ　顔の違いと同じです
固いか　緩いか　程々か　その結び目が大事です

君がいたから青春だった　君がいるからあたたかい
人は誰でも　そんな友達　探し求めて旅をする

学生たちに、人との交わり、絆を大切にしてほしいという気持ちを込めて、この歌詞を読み上げていました。
じつは私の母もがんで亡くなりました。現代のようにがん治療が進んでいない時代でした。
がんは身の内。明日は我が身。がんは自らの細胞の一部です。
がんを恐れるのではなく、がんと共に豊かに生きていく。これが私の信条です。
本受賞を今後の励みとして胸に刻み、がんと共に生きる人々への支援をできるかぎり続けながら、我が人生を満喫していきたいと思っております。

佐藤 禮子さん
日本教育財団東京通信大学人間福祉学部名誉教授、
千葉大学名誉教授、NPO法人キャンサーリボンズ理事
元日本がん看護学会理事長

推薦人●清水 多嘉子（がん研究会有明病院 副院長 看護部長）

佐藤さんは2008年よりNPO法人キャンサーリボンズが主催する「キレイの力」プロジェクトのリーダーとして、看護学生にヘアドネーションをしてもらい、女性のがん患者さんに医療用ウイッグを贈る活動を進めてこられました。この14年間で9千人の看護学生に趣旨を説明されたとお聞きしています。

成人式に髪をアップにして晴着を着たい学生にとって、その直前に髪を切るのは大きなハードルです。パーマやカラーリングができないことも、年頃の女性にとって非常にハードルの高い条件です。

これらをしっかりと説明し、同意を得た学生の協力によってウイッグがつくられるため、看護学生ががん患者さんの人生に思いを馳せるいい機会になります。看護学生の患者さんの回復への思いを信じる佐藤さんの教育者としての信念も併せて成功したプロジェクトだと私は感じています。

これまで400人もの患者さんに医療用ウイッグが提供され、当院の患者さんにもご提供いただきました。私もその瞬間に何度も立ち合い、患者さんの心からの感謝と喜びの気持ちが、同じ女性として胸に刺さりました。がん治療にはお金がかかります。「さらにカツラを買ってほしいとは、とても主人に言えませんでした」と何人もの患者さんがおっしゃいました。

昨年8月にがん診療連携拠点病院の指定要件が改訂され、「がん治療に伴う外見の変化についてがん患者及びその家族に対する説明やアピアランスケアに対する情報提供・相談に応じられる体制を整備していること」が初めて求められることになりました。

命に関わることではないと、アピアランスケアは長い間見過ごされてきました。けれども、髪がなくなることによって自分らしさを喪失することや、対等だった他者との関係に変化をもたらすことが、近年明らかになっています。アピアランスケアがなければ、多くの患者さんと社会とのつながりが断たれてしまうと言われています。

このような考え方が乏しかった時代に、このプロジェクトが多くの方に影響を与え、国内に重要な流れをつくってくださったと感じています。ヘアドネーションの草分けであり、NPOと複数の企業、看護学生、医療機関が協働する活動として、多数のメディアでも取り上げられました。医療界、アカデミアの枠を超えて、社会とのつながりの中で看護学生を育成し、患者さんの長期的な療養環境の向上をめざす活動を牽引してこられた佐藤禮子さんに心より感謝を申し上げます。

花輪 啓子さん
社会福祉法人やまなし勤労者福祉会
共立介護福祉センターいけだ統括センター長

このたびは素晴らしい賞をいただき、心から感謝申し上げます。
私は1979年に看護学校を卒業して病院に入職しました。そこで外来勤務や、通院を中断された方のフォローや、慢性疾患で通っておられる方から手遅れを出さないという取り組みをしてまいりました。
治療を中断された方の理由として「仕事が忙しい」「お金がない」などがあり、生活に目を向けること、今でいうSDGsの視点の大切さを学んだように思います。
1998年の訪問看護ステーションの開設から本格的に訪問看護を始めました。看護師人生のほとんどを在宅生活を支えることに費やしてきたように思います。
最後まで慣れ親しんだ自宅で暮らし続けたい。でも、家族のことを思うと、断念せざるを得ない。そのような言葉に、訪問看護師として無力感を覚えることがありました。
2015年に看護小規模多機能型居宅支援事業所の立ち上げに携わり、最後まで家で暮らし続けることができる地域をつくりたいと思い、今はその普及活動を続けております。
ここ数年、新型コロナウイルス感染症が猛威をふるいました。とくに2022年の第7波、第8波では、多くの施設でクラスターが発生し、感染者が施設や在宅で療養することが当たり前になりました。
在宅での療養を支えたのは、訪問看護師や施設看護師たちでした。マスク、ゴーグル、防護服を付け、自宅や施設内の療養看護をしました。

感染後、体力が戻らず、図らずも人生の終わりを迎えた方もおられましたが、訪問看護師や施設看護師がコロナ後の生活の再建を支え、最後まで寄り添い続けました。

僭越ではありますが、今回の受賞を訪問看護や施設看護の仲間たちと分かち合いたいと思います。

花輪 啓子さん
社会福祉法人やまなし勤労者福祉会
共立介護福祉センターいけだ統括センター長

推薦人●福井 トシ子 （公益社団法人 日本看護協会 会長）

花輪啓子さんは、昭和54年4月に病院看護師として入職して以来、地域医療を支える看護職に従事されています。「地域の人々に安心して在宅療養生活を送ってもらいたい」という信念のもとに、介護保険制定前の平成10年から訪問看護ステーションの立ち上げに関わり、在宅医療の発展に尽力してこられました。

平成27年からは山梨県内には数少ない看護小規模多機能型居宅支援事業所の開設に取り組まれました。訪問看護事業所は全国で1万ほどありますが、看護小規模多機能型居宅支援事業所はまだ1千以下です。それを早くから花輪さんは山梨県に創設され、地域の人々に療養の場を提供してこられました。

私が花輪さんと知り合ったきっかけは、山梨県看護協会の古屋会長が「山梨にはスゴイ人がいるのよ～。ナイチンゲール賞をいただくような人なのよ」と何度もおっしゃったことでした。「看護の母のような人」とも形容されていました。それで、「ナイチンゲール賞よりももっとすごい賞があるのよ」と、今回私が推薦させていただいた次第です。

「必要なサービスや仕組みはみずから創り出していく」という花輪さんの強い信念と並外れたパワーで、「住民のニーズ」に寄り添い、地道に実践を続けてこられた花輪さんの功績を称え、ここに推薦させていただきました。これからもきっとそのパワーで、山梨県のみならず全国に広めていただけると思います。

ご挨拶
山中 伸弥様　（※VTR映像でご出演）
（京都大学iPS細胞研究所所長・教授、公益財団法人iPS細胞研究財団理事長）

京都大学IPS細胞研究所の山中伸弥です。
第6回未来のいしずえ賞の授賞式が盛大に開催
されますことを心からお祝いを申し上げます。
開催にあたりご尽力されました児玉会長はじめ
関係者のみなさまに深く敬意を表します。

私も引き続き未来に向かって 強い意志を持って
努力されている方々を応援していきたいと思います。
このたびは誠におめでとうございます。

ご挨拶
中村 清吾様
（昭和大学臨床ゲノム研究所長、昭和大学病院ブレストセンター長）

第6回未来のいしずえ賞受賞の皆様、本日はおめでとうございます。
私は昭和大学に13年前に就任し、その前の28年間は聖路加国際病院に勤務しておりました。
入職時は日野原重明先生が看護大学の学長をしておられ、週に1回の内科の回診時に「泳げない者は溺れている人を助けられない。チーム医療の担い手になるためには、泳ぐ力を身につけなさい」と言われたことを鮮明に覚えています。

侍ジャパンでもキャッチャーが残りの8人の選手を見て“扇の要”を果たしていることがチーム力を高めていると感じましたが、マスメディアはなかなかキャッチャーを褒めてはくれません。

でも、このいしずえ賞は、チーム医療の要となる看護職の方にスポットを当てておられます。
たとえば看護学生のヘアドネーションによってがん患者さんのウイッグをつくるプロジェクトは、看護を学ぶ学生が早い時期に、患者さんのからだの痛みだけでなく心の痛みを感じることができる素晴らしいプロジェクトだと感じます。卒業された方は、患者さんの心に寄り添って癒すことを実践されるでしょう。このプロジェクトが種となって、将来大きな花を咲かせることにつながるのではないかと思います。

本日受賞された方々が、今後ますます日本の力になっていかれることを祈念しております。

推薦人・実行委員

特別賞　森保 一さん

代理人 公益財団法人日本サッカー協会 会長　田嶋 幸三さん

実行委員・推薦人

実行委員・受賞者

財団役員
推薦人・実行委員・受賞者

井川 順子さん
実行委員・推薦人

片岡 弥恵子さん
実行委員・推薦人
ご招待者

佐藤 禮子さん
実行委員・推薦人
ご招待者

花輪 啓子さん
実行委員・推薦人
ご招待者

締めの言葉
鳥飼 重和 「未来のいしずえ賞」実行委員

本日は6回目の未来のいしずえ賞授賞式となりました。
授賞された方々の言葉をお聞きするたびに毎回素晴らしいと思うのですが、今回はとくに素晴らしいと感じました。

おそらく世の中にはあまり知られていない、このような方々の地道な努力が、今の日本を支えているのだと思いました。

受賞者の皆様には本当に感謝を申し上げます。ありがとうございました。